

3-10. 川上村定住促進課（奈良県川上村）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】 1,539人 平成28年1月末現在

【面積】 269.26k㎡

【地勢】 奈良県南東部、大峯山脈と台高山脈の谷間に位置する内陸地

【気候、自然】

多雨が特徴である山岳性気候。台風や梅雨による雨が極めて多く、村の中央を流れる紀の川の源流である大台ヶ原は4,000mm以上に達する日本屈指の多雨地帯。

【歴史】

日本三大人工美林に数えられる吉野杉の主産地。植林の歴史は室町時代にさかのぼり、すぐれた樽用材として発展してきた。

【観光】

山や滝、鍾乳洞、ダム湖、丹生川上神社上社、匠の聚（芸術家村）、森と水の源流館

【地域資源の概要】

村全体がユネスコエコパークにエリア拡大の登録申請中。

緩衝地域である原生林では入山規制などの保全に取り組みながら環境教育のシンボルとして活用され、移行地域ではダム湖のカヌー、伐採見学ツアーなどが展開されている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

《背景》

奈良県川上村は紀伊半島の南東部に位置し、吉野熊野国立公園にも地域指定が行われています。

本村では、平成8年にきれいな水を流し続けることを誓う「川上宣言」を発信。

平成11年には、740haの原生林「吉野川（紀の川）源流一水源地の森」を購入保全。この森は公益財団法人 吉野川源流物語に管理を委託。この森をフィールドに実施する大阪工業大学新入生オリエンテーションには近畿地方環境事務所のレンジャーの支援もいただき、他団体も含め広く環境教育の普及に努めている。

平成27年4月からは、地域おこし協力隊によるエコツアー推進プロジェクト「山遊び塾ヨイヨイかわかみ」が活動を開始しました。これまで、おおたき龍神湖（大滝ダム）の湖面を活用するカヌーツーリングや石灰岩地ならではの洞窟探検、登山やハイキングなどを展開してきました。

現在、ユネスコエコパークの更更新手続き中で、村内全域を移行地域へと手続きを進めています。

《地域課題》

地域おこし協力隊の任期は3年間となっており、彼らの定住定着を後押しするためにも、プログラムの充実や収益性の確保などが今後の課題となっています。

ユネスコエコパークでもある川上村において、持続可能な産業モデルとして確立をめざしています。

新しい産業モデルへの地域住民の理解や参画を促したいと考えています。

《申請目的》

上記のような課題を解決するため、今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣を利用させていただき、エコツーリズム推進にあたってのプログラムの企画や運営、収益性の確保などに取り組みたい。その上で、関係者の連携を深める団体の立ち上げを検討していきたい。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	【1回目】平成28年1月20日（水）～平成28年1月21日（木） 【2回目】平成28年2月1日（月）～平成28年2月2日（火）
場 所	奈良県川上村
ア ド バ イ ザ ー	【1回目】有限会社屋久島野外活動総合センター代表取締役 松本 毅氏 【2回目】有限会社オズ代表取締役 江崎 貴久氏
参 加 者	【1回目】計13名 【2回目】計12名
スケジュール・方法	【1回目】視察（森と水の源流館、不動窟、大滝ダム、朝日館、吉野杉の人工美林、御船の滝、水源地の森）、屋久島の事例紹介、川上村に対する助言指導 【2回目】視察（森と水の源流館、匠の聚、大滝ダム、白川渡オートキャンプ場、人工美林、農家民宿 HANARE、樽丸製作技術、朝日館、柏木区、神之谷区）、川上村に対する助言指導

(3) アドバイスの内容（議事録）

【1回目】松本 毅氏

1) 屋久島事例に基づく事例指導

- ① 屋久島野外活動総合センター（YNAC）設立の経緯説明
- ② YNACが現在のツアースタイルに至る流れ（エコツアーは情報産業）
- ③ ツアープログラムの作り方（テーマとストーリーが重要）
- ④ ツアーの売り方とマーケティング

2) 意見交換会

テーマ：川上村の今後の観光ビジョンについて

① 現状の整理

- ・ 川上村にはそれぞれの観光資源（滝、水源地の森、洞窟、人工美林など）に魅力はあるが、観光業を推進するうえで村全体（住民も含めて）の明確な方針（ビジョン）が見えない。
→ 地域住民を巻き込んでビジョンについて考えていくべき。

② どういう観光客に来てもらいたいのか

- ・ 都市部からは選択肢が豊富なため、川上村に観光客として呼び込むには、川上村を訪問するに値する目的が必要。

- ・ 屋久島への訪問目的は主に「縄文杉」
- ・ それに対して、川上村の現状では「縄文杉」に匹敵する呼び込み材料は見当たらない。
- ・ 単に川上村の知名度を上げるだけではダメ。
「原生林」「豊かな自然」は他地域にもあるので効果が薄い。
→ エコツアーによる川上村全体（村そのもの）の魅力を発信。
- ・ 宿泊客数を増やすべき
宿泊が伴うと経済効果が大きい→民宿の活性化

③ 白川渡オートキャンプ場

- ・ 管理者（地域住民）にビジネスプラン（地元食品の販売など）のアドバイスが必要。
→ 地域住民の巻き込みにつながる

④ エコツアーを民間事業として成立させるには

- ・ YNAC立ち上げ時は採算ビジョンが見えてなかった。
→ とりあえず事業を立ち上げてみるのが重要

⑤ 地域おこし協力隊によるエコツアー事業（ヨイヨイかわかみ）へのアドバイス

- ・ ツアーの目的（テーマ）を明確にして売り出していくべき。
例：YNACだと「屋久杉はこのようにして巨木になった」
- ・ 新しいタイプのツアープログラムを絶えず試験的に実施してはどうか

⑥ 安全管理について

- ・ YNACでは安全管理マニュアル（事故対応の仕方、中止の条件など）を文章化。
- ・ ツアー当日、参加者にカウンセリングシート（体調、持病、運動歴、体力など）を書いている。
→ ツアー中にガイドの安全管理の判断材料にする

⑦ 営業の仕方について

- ・ 売り込むにはプログラム数の充実と内容の確立が必要。
- ・ 核となるプログラム2つ程度を確立させる。
例：ヨイヨイかわかみの場合だと、カヌーと洞窟探検
- ・ ツアー内容、季節によって変化する顧客層に対応する。
例：夏休みを利用した家族連れが多い傾向がある
- ・ ホテルとの連携をもっと進めるべき。
知床の事例だと、ホテルに自然情報を提供
例：滝が凍っているかどうか、桜は見頃かどうか、登山道は歩き易いか
- ・ 受注式のツアーをめざす。
指定した開催日に客を集める方式から、ホテルの宿泊者が参加したいツアーの日を希望し、それに応じて開催する方式をめざす。



水源地の森



山の神の祠



御船の滝（氷瀑）



不動窟鍾乳洞



川上村役場にて意見交換会

【2回目】江崎 貴久氏

まとめ（川上村に対する助言指導）

テーマ：川上村の観光を「産業」へ

地域内の協力体制づくり

観光による地域振興 ～奈良県川上村でのエコツーリズム活用～

1) エコツーリズム推進法の概要説明と川上村で実施するには

- ・ エコツーリズム推進協議会の定義
- ・ 市町村の役割は全体構想の作成、組織運営
- ・ メリット
- ・ 市町村が定めた全体構想を国が審査し認証することで、地域の資源保護を行いつつ、広報をより効果的に実施できる。

2) 川上村のエコツーリズムのポイント

- ・ エコツーリズムは観光資源活用のための土台づくり。
第5次川上村総合計画にそって今後10年を進めていくべき。
- ・ 川上村はエコツーリズムに適した地域である。
エコツーリズムの定義は未だ確立されておらず、川上村ならではのエコツーリズムを打ち立てて推進していけば良い。

川上村の観光を自然と人との「ふれあい」から、
10年後には暮らしと地域の価値を支える「産業」に

村内にエコツーリズムという理念への賛同者、理解者、協力者を増やす

3) 鳥羽市のエコツーリズムによる地域振興事例

- ・ 鳥羽市の産業構造の紹介
かつては漁業がメインだったが、現在は第3次産業がメインである。
→ 1次産業の衰退
- ・ 1次産業の衰退はアワビとアラメなどの水産資源の減少だけでなく、海女文化を含めた漁業全体の衰退を示す。
漁業が衰退すると離島の人口も減少。
→ エコツーリズムに必要な地域資源の減少
- ・ エコツアーの副収入により、海女の収入の増加
→ 海女文化の保全

4) 観光による地域振興の2つの起点

①宝物さがし：おもしろい！と思うもの ←客からの視点（客にとっての価値）

- ・ 地域資源の観光資源化（地域資源と観光資源は別）
→ 資源はその価値や希少性について伝わる工夫があってはじめて観光資源となる

②地域の声：課題やニーズ ←地域住民の視点（受け入れ側の価値）

5) 観光が地元民と客をつなぐ旅のコツ

エコツアーを継続するには観光客と地域の相互依存が大事

6) エコツーリズムによる地域への教育的効果

- ・ 子どもガイドボランティア～菅島「島っ子ガイド」～の紹介
- ① ガイドをすることで子どものコミュニケーション能力の向上
- ② 島の知識、愛着、理解の増加
- ③ 子どもの観光に対する意識変化→大人の変化→島の変化

7) 実際にエコツーリズム推進協議会を作るには

- ・ 鳥羽市にエコツーリズム推進協議会を作ったとき「エコツーリズム」とは、どういったものか。その理念や定義が推進協議会のメンバーとなる関係者に伝わりにくかった。
→自分なりの方法で伝える（関係者に実際にツアーに参加してもらい、他人を介して伝えるなど）
- ・ 川上村だとエコパークの認定をきっかけに各自治体と連携して作成できないか
→ 自治体間の取り組みの温度差が課題

※道路運送法の規制緩和を適用できるのは認定地域内に限る。

最寄駅である大和上市駅（吉野町）からの送迎の場合、吉野町を含む広域の協議会設置を行うか、吉野町でも協議会設置してもらい参加する必要がある。

意見交換会

1) 全体構想が定めるガイドラインについて

- ・ 全体構想で規制（水源地の森への人数制限など）を定めた際、業務形態などの業者間の意識の違いをどう整理するのか？
 - 違反の罰則はない。しかし、全体構想で定めた規制は国が認証した規制であり、それを守らない業者は客と地域からの信頼を得られ難くいはず。
- ・ 河川法第 24 条では河川での釣り・カヌー・川遊びなどは自由に行える（自由使用）
 - カヌーと釣り客との軋轢の問題 → 推進協議会によるガイドライン作成の必要性

2) 川上村でエコツーリズム推進協議会の立ち上げについて

- ・ 鳥羽での立ち上げの際は協議会の周知のために時間を要し、設立を当初の予定より 1 年遅らせる必要があった。
 - 川上村では「川上宣言」があるので、それをもとに協議会を立ち上げてはどうか。
- ・ 協議会のメンバーにはエコツアー関連業者のみが関わるのか？
 - 地域のさまざまな団体が関わる。

鳥羽市エコツーリズム推進協議会 構成団体（五十音順）

(財) 伊勢志摩国立公園協会	鳥羽市観光課
いせしま森林組合	鳥羽市観光協会
NPO 法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター	鳥羽市自治会連合会
海の博物館	鳥羽志摩農業協同組合
相差海女文化運営協議会	鳥羽商工会議所
海島遊民くらぶ	鳥羽市水産研究所
環境省中部地方環境事務所	鳥羽市旅館組合連絡協議会
島の旅社推進協議会	鳥羽まちなみ水族館
鳥羽磯部漁業協同組合	パドルコースト鳥羽カヌーサービス
鳥羽ガイドボランティアの会	兵吉屋はちまんかまど
鳥羽観光施設連合会	三重県雇用経済部 観光・国際局観光誘客課
鳥羽市環境課	三重県農林水産部みどり共生推進課公園管理G

- ・ 推進協議会の全体会議は年に何回くらい？
 - 年 4, 5 回程度の開催。普及啓発部会と循環連携部会の 2 つあった。しかし、互いの情報共有の重要性から今年度から 1 つに統一した。



樽丸職人による樽丸製作実演



準備中の農家民宿を訪問



修験道の元宿場町 柏木地区



川上村役場にて意見交換

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・ 観光業を推進するうえで「村全体（住民も含めて）の明確な方針（ビジョン）が見えない」と、アドバイザー2人に指摘された。
川上村において、エコツアーリズム全体構想を導入することが有効であると感じられた。
- ・ 観光を川上村の中でどう位置付けるかの整理ができた。（「ふれあい」から「産業」へ）
- ・ プログラムの組み立て方など、具体的かつ実践的な手法を学ぶことができた。

2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ エコツアーガイドを生業とする者の成立
- ・ 観光資源を商業目的で利用するうえでのガイドライン作成
- ・ 地域全体（住民、行政、事業者など）のエコツアーリズムへの理解向上
- ・ 観光産業全体の拡大

3) 今後の取り組み

- ・ 地域おこし協力隊によるエコツアー事業の本格化
- ・ 村内宿泊施設とエコツアー事業の連携
- ・ 全体構想策定の検討

(5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- ・ YNAC（屋久島野外活動総合センター）：プログラムの作り方、営業、安全管理など。
- ・ 海島遊民くらぶ：地域におけるエコツアーの位置づけ、関わり方など。

2) その他感想

- ・ これまで試行錯誤していたエコツアーの取り組みについて体系的に考えることができ、エコツアーリズムの持つ大きな可能性に気付くことができた。
- ・ エコツアー事業を川上村に定着させるためには、事業関係者以外にもエコツアーリズムの理念を理解してもらい、協力者を増やすことが必要だと分かった。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

松本 毅氏 (有限会社屋久島野外活動総合センター 代表取締役)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

川上村は、林業の全盛期に比べ人口が激減し、更に大滝ダムによる村の水没で若者が村外に流出し、人口の減少と高齢化でいわゆる「限界集落」となりつつあります。しかし、川上村として「川上宣言」と「水源地の森」の取り組みが始まり、吉野川の源流の天然林 740ha を買い上げ、調査活動とともに環境教育の場として「森と水の源流館」を拠点に村役場、地域おこし協力隊の若い人を中心にエコツーリズムの取り組みが始まっています。

②課題

資源としては、天然林、吉野杉の人工林、きれいな沢、鍾乳洞、昔ながらの町並み、村を水没させたダム、ダムに沈んだ遺跡、温泉など申し分ないものがあります。しかし、村としての取り組みは始まったばかりであり、知名度がないため、現在行っているモニターツアーの継続や事業化できないという課題を抱えています。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

- ・ 大台ヶ原につながる吉野川源流の天然林 740ha を村が所有しているということ。
- ・ 500 年級の吉野杉の人工林が残っていて大変美しい。
- ・ 計画から 50 年の年月を経て 2012 年に供用が開始された大滝ダム。それにより村が移転をしたため、きれいな街並みになり、道路も広くアクセスがいい。
- ・ 一方、修験道の宿場として栄えた明治より開業している「朝日館」や修業の場となった鍾乳洞、丹生川上神社上社など貴重な歴史的資源がある。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ・ 村の所有する天然林には、非常に貴重なトガサワラが残されていたり多様な針葉樹・広葉樹の森があり、コケやシダの種類も多く、トレッキングや自然観察の場として大変優れています。また、コースとしてもコンパクトでいろいろな組み合わせをすることでニーズに合ったツアーを組むことができる可能性があります。
- ・ また、500 年級の吉野杉の人工林は川上村の林業の歴史を物語っていて、天然林と人工林の対比を含め、環境教育の場として非常に有効であると思います。
- ・ また、吉野川の源流の村が、治水ダムとして作られた大滝ダムによって水没した歴史を持っており、川という縦のつながりを考える貴重な地域だと思います。

3) アドバイス（講義等）の概要

屋久島の事例として、世界遺産前は林業の衰退とともに人口減少がひどかったこと、世界遺産になりエコツアーが屋久島の人気を上げていったこと、縄文杉という特別なものに頼りすぎて屋久島の魅力が薄れてきたこと、ガイドの質が問われてきていること、など屋久島の現状について講義をしました。

次に、川上村の現状と課題について議論をしました。

素晴らしい資源を有していても川上村に行く理由が明確でなければなかなか人は訪れてきてはくれません。「川上村で〇〇を見たい、〇〇をしたい」という明確な目的を提示することが必要です。「川上村で〇〇を見よう、〇〇しよう！」というキャッチコピーをもって、マスコミや旅行エージェントに営業をしなければ、注目を浴びることはできません。

大変すばらしい資源と施設を持ち、若い人の取り組みが始まっているので非常に期待ができる場所です。

これからは、しっかりと外への営業を開始しなければなりません。これから10年後20年後に川上村がどうなっているべきかという明確なビジョンを持って、そのためにはどのようなところに営業をすべきかを具体的に議論しました。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

まだエコツーリズム推進全体構想について具体的な取り組みは始まっていませんが、村として「川上宣言」という大きなビジョンのもとに、村役場の定住促進課、水源地課という複数の課がエコツーリズムについて取り組みを開始しています。

②全体構想策定への意向について

今のところ、漠然とではありますが特定観光資源の指定や利用調整について考えていく意向が感じられました。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

今後、エコツーリズム推進法や全体構想の取り組みについて勉強会などすることによってその目的や必要性について理解し、全体構想認定に対する具体的なイメージを持つことが必要と思います。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

エコツーリズムに対するポテンシャルは高まってきていると感じました。すでに核となる人たちが精力的に動いていて、地域住民の意識も徐々に変わってきています。「川上宣言」という大きなビジョンを具現化するためにもっと地域住民を巻き込んで丁寧な議論を進めていき、一つ一つが実現していくことによって大きく変わっていくと思われれます。

その方策として、エコツーリズム推進全体構想の議論を開始することが期待されます。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

江崎 貴久氏 (有限会社オズ 代表取締役)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

川上村は、室町時代から林業で成り立っていた地域である。険しい山々に囲まれ、背後は大台山系につながる地形の中で、農業も難しかった。南から北へ流れる吉野川の上流に位置しており、林業も吉野川で筏を組んで流す運送方法なくしては発展することは難しかった。その林業の衰退とともに、村の衰退と人口減少が進行している地域である。村の最大の財産として、吉野川とその源流域の森が位置付けられており、それに基づいた「川上宣言」がなされている。

地域おこし協力隊の制度を、地域の活力としてだけでなく情報発信メディアとしても活用している。地域は、地域おこし協力隊に制度終了後も定住を期待するのが一般的である。もちろん、そのまま定住してもらうことにも意義はあるが、それを期待するあまり地域の住み心地のイメージが下がってしまうことのリスクを考慮し、自由な選択ができる雰囲気づくりをしている点が、この制度の現場での活用における発展として見受けられた。今回も地域おこし協力隊が主体となって、アドバイザーの受入を行ってくれた。



今回、受入・視察案内をしてくれた皆さん

以下、エリアごとの取り組みと現状である。

【源流周辺】

川上村三之公の森は、長い間人の手を入れることなく自然のまま残されてきている。しかし、かつては林業が栄えてくるとともに、山の奥部へと林業の手が伸びていった。そこで、川上村は水源地にとって重要な原生の森の消滅の危機にいち早く対応した。日本では経済発展が著しい時代、貴重なこの森を川上村が購入・保全し、管理は「森と水の源流館」が行う仕組みをこれまでに作り上げている。こうして、現在でも「水源地の森」は、貴重で多様な植生を保っており、その重要性が地域住民の精神性に影響している。そして、この歴史そのものが住民や林業の理念に深く関わっている。

【上流部】

手つかずの水源地の森の下には、人が長年にわたり丁寧に手を入れてきた100年以上の、中には300～400年のスギ林が存在している。これらのきめ細かく節のないスギの用途の優先順位は、1位が樽丸であり、建材ではないという点が意外であった。私たちの食文化を支える醤油や酒等、液体の運送や貯蔵に樽が欠かせず、「水が漏れない」樽づくりは、「水が抜けない木材」づくりの間伐技術と樽丸づくりが支えていたからである。

全国各地で、放置、または手を入れる間隔が減少したスギ・ヒノキの林が多くなっており、一般的にも国内産木材の利用減少による放置林のイメージが強くなり、そうした木々の活用は木造住宅、内装外装の木質化から、木質チップといった瞬間的な燃料としての消費にまで至っている。しかし、川上村では、数百年にわたり受け継がれてきたスギ材を売れないからと言って、使い道を問わないというわけにはいかない。そのため、今も樽丸製作を継続しつつ、300年以上のスギ林ではハウスメーカーと林業が連携し家屋の建築予定や希望者に良質な建材の付加価値を理解してもらうため、見学会を開催している。

樽丸づくりも、視察対応や特別な際にはヒアリングと見学が可能となっており、林業の歴史と林業周辺の産業、そして町の歴史が樽丸を通して理解できるストーリーが語られる。

地域おこし協力隊による取り組みが行われており、農家民宿HANAREは地域おこし協力隊の二人が古民家を活用し宿舎として改装している。今後、あらたな顧客開発が期待されている。また、柏木・神之谷地区には朝日館をはじめとする歴史深い宿や家屋が立ち並んでいるが、廃業しているものが目立っている。ここは交通の要所としてかつて栄えた地域であり、華々しい歴史文化と生活文化が街並みから想像できる地域である。



川上独自の育成方法で受け継がれている300年以上の杉林。



樽の見本。この側面の板を樽丸といい、川上村で製作されている。



樽丸づくりの実演



協力隊による古民家の活用例

【下流側】

役場がある下流側の地域では、計画的に様々な側面から川上村のゲートとしての機能を持たせているように思われる。

森と水の源流館があり、川上村が林業を守っていくうえで、必要な原生林の保護に大きく舵を取ったことが、この施設のテーマに深くかかわっている。旅行者や移住者が初めてこの地域に入るにあたり、地域に実際見えるものの背景や住民のマインドの中心を理解することができるための重要な役割を果たしている。

また、ギャラリーを併設した「匠の聚」がつくられ、周辺では芸術家のアトリエを整備することで移住促進を進めている。集合団地のような形態をとり、その中心的な施設として「匠の聚」があることで、移住した住民と外部者、地域住民の接点となっている。

50年も計画と建設に費やされた大滝ダムがある。山から海までの距離が短く、水害に頻繁に悩まされた地域で、建設によって水没する地域を中心とした反対運動も大きかった。現在は、村における大滝ダムの位置づけは、地域住民に理解されている。



「森と水の源流館」現流の森解説



大滝ダムのメモリアルボード

②課題

- ・ 地域の主たる産業であった林業の衰退。林業に付随した宿泊業や飲食業もともに衰退している。結果、人口減少と高齢化が著しい。
- ・ 木材の品質が高く、その品質の背景は職人技術、村全体での自然資源の管理システムなど、奥深さと土台の広さの上に、長期にわたる緊張感が不可欠であるため、新たな顧客開発に「手軽さ」と「安価」に通じる戦略を打つことは、村の経営資源の保全とはならない。そのため、活性化の手法に限られる。
- ・ また、長期的管理と土台の広さに連続性が不可欠であることから、全体の足並みがある程度そろった取り組みを必要とする。
- ・ 定住促進事業と協力隊の制度を利用しているため、地域を選んだ納得が持てる必要があり、それは「住むこと」と「働くこと」両方に共通した地域性と「自分流」の価値の融合が求められる。こうした中で、川上村の若手を中心とした人々からエコツーリズムの手法が注目されており、理想を求めつつ自走できる環境整備が必要となっている。
- ・ 自走のためのエネルギーが十分ではない。村の中で、森と水の源流館の関係者や地域おこし協力隊など、エコツーリズムを実践する意思のある人々以外は、まだまだ受け身であるため、積極性を引き出す必要がある。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

- ・ 水源地、ダム建設時の設備
- ・ 品質の高い吉野杉と、100年以上にわたり世代をこえて品質管理する技術
- ・ 伝統の樽丸づくりと新たな木材の利用として、カヌー作り。余材を使った箸の製造。
- ・ 古民家に様々な種類がある。（一般家庭の家屋、宿泊施設、店舗等）
- ・ 金剛寺・自天親王神社と住民の精神性

②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ・ ダムの歴史に、この村の人々だけではなく建設に関わった他所からの人々との理念や愛着の共有が感じられ、何気ない水や景色に深い思いを寄せることができる。他所からくる人々の心のルートマップの役割が可能であると感じた。森と水の源流館に並ぶ、オリエンテーション機能がある。
- ・ 一般的な林業のイメージは、メディアなどを通して認知されているが、川上村の林業には地域ならではの戦略や手法があり、一般的な木材よりも価値が高いと認識できるストーリーがある。
- ・ 木材の使い方から、日本人の自然の無駄のない使い方に優しさを感じる。一方、樽丸は作るが「樽」自体は次のプロセスとして他の業者や地域に委ねられるところから分業による他との依存関係の中に、つながりや絆と言われる形の実態を知ることができる。自己完結型の六次産業化や地産地消だけでなく、あえて他を求めることで付加価値を増加させる手法とのバランスにエコツーリズムの教育的な視点に立った奥深い資源性を感じた。
- ・ 古民家の空き家は、木材供給基地であるため、建材が良いものと考えられる。そのため、他地域の空き家に比べて、空き家であるにもかかわらず、荒廃感が少ない。また、空き家も増えていることはマイナスイメージだが、逆に一般の民家から、宿泊施設、店舗と様々なタイプの空き家があるため、村の幅広い用途や多様な目的の移住者受入整備として考えることが可能である。
- ・ 金剛寺・自天親王神社は、先祖の正義のあり様を今に伝えるものであり、川上村の物事に対する姿勢や正義感として誇りの源である。こうした正義を大切にする理念が、源流の森の保護への決断や川上宣言の根底にあるように感じた。



樽丸の端材。割りばしに利用される。



宿場町の街並みの空き家

3) アドバイス（講義等）の概要

川上村の現状から、次へのステップアップの鍵となりうるポイントについて提案した。

① 地域に最大効果をもたらす土台を、協力隊・民間事業者・行政・公的団体の若手で目標化し共有する。

人口減少ももちろんであるが、若者の存在が極めて少ないため、若者一人一人の村の将来に対する影響が強い。現段階の主たるプレイヤーである協力隊・民間事業者・行政・公的団体の若手が個々の10年後の結果を得るための手段の選択で、川上村の将来が大きく変わる可能性がある。

② 若者の仲間で、川上村の総合計画を確認し自身の暮らしや事業と関連付けて考える。

これまでの川上村の歴史と村の資源に対する認識と考え方には、いつも正義が基準にある。エコツーリズムを進めるには、とても適した基盤が揃っていると思われた。そこで、川上宣言に基づいた川上村の観光の進め方を整理し共有しておくことで、共通認識の上に進めることができる。簡単に彼らの説明から、理念・進めたい戦略・戦術のイメージを提示するとともに、その先に見据えておく効果的であると思われる視点を示した。

理念としては、「水源と林業から大切なことを伝えるための観光」がこの地に望ましいと考えられている。そのための戦略は、持続可能・地域資源に責任を持った観光のあり方を実践することが、住民にとっての正義に寄り添った自然な戦略となりうる。また、さらに持続性が必要であるため、根本的な課題である村の林業や経済とともに発展するような方針と目的が必要である。そのためには、地域資源の管理と林業の側面的な保全を産業化する工夫が必要である。そして、戦術としては、これらのことからエコツーリズムの手法を使うことがふさわしいと判断した。エコツーリズムの手法を取り入れるにあたっては、多世代、異業種での理解と活躍の場が取り組みの広がりを作り出すとともに、定住促進事業と協力隊の制度を意識的にライフスタイルと職の一貫性の実現のために活用することで川上村の歴史の前に朽ちない深みを作ることに効果があると提案した。

③ 協力者や理解者を増やす

エコツーリズムに取り組むための初動には十分な環境が揃っている。このタイミングで、効果の継続と安定を見据え、協力者や理解者を増やし、行政が関与する意図的な取り組み拡大から自然的な拡大を促す仕掛けをしておくことで、マンネリ化を防ぐことができる。例えば、エコツーリズムに関わる可能性がある人々をタイプ別（下の図参考）に分類し、それぞれが実現可能な夢を提供できるよう企画に盛り込んでいくといった「雰囲気」の可視化も尺度の違う地元の人々と移住者の協働を進める上でスムーズな運営が期待できる。

川上村のエコツーリズムのポイント

- 地域に最大効果をもたらす土台を協力隊・民間事業者・行政・公的団体の若手で目標化
10年後の川上村は、それぞれの10年後のポジションまでの道のりが大きく影響する。
理念：「水源と林業から大切なことを伝えるための観光」
戦略：持続可能・地域資源に責任を持った観光のあり方→**地域資源の管理と林業の側面的な保全を産業化**
戦術：エコツーリズムの手法を使う→**多世代、異業種での理解と活躍の場**
定住促進事業と協力隊の制度利用→**ライフスタイルと職の一貫性を実現**

川上村の観光を自然と人との「ふれあい」から 10年後、暮らしと地域の価値を支える「産業」へ

- 賛同者、理解者、協力者を増やす
・理念に共鳴する人 ・自己啓発を求める人 ・必要とされたい人 ・若者に協力したい人...

川上村内の人々に誇りを、村外の人々に実現可能な夢を提供する

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

現在は取り組んでいない。訪問前は、特に意欲的ではなかった。理由は、川上村で取り組むメリットが見えなかったからであると考えられる。

②全体構想策定への意向について

今回のアドバイザー訪問によって、川上村がエコツーリズムに取り組むことが適した地域であることが受入をしてくれた皆さんと分析できた。皆さんとそれを共有したことで、全体構想への意欲が高まった。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

全体構想を進めるために、行政側と住民の環境整備が必要である。すでに地域活性化のための協議会が設置されており、目的が類似しているため既存の協議会とどのように位置づけるか、同協議会で全体構想を担う協議会として可能かを検討する必要がある。

そして、進めるにあたり共通の理解を必要とするが、川上宣言というベースとなる考え方が既にあるため、これを基に全体構想に取り組むことは川上村の自治スタイルに馴染む方策であり、住民も受け入れやすいと考えるため効果が期待できる。

これらを踏まえて、取組に舵を切るためには行政の三役への報告・相談の機会を若手が持つことも有効であると考えられる。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

川上村は、日本の産業が発展し景気がどんどん良くなり開発が盛んになる中、吉野川の源流の森を買取り、守ってきた村です。その理念は川上宣言として受け継がれています。

そして、もう1つ、受け継がれてきたものが、林業です。杉林の中には400年以上育てられてきた杉の木たちもありました。川上村特有の密植の方法で、長い時間と少しずつの間伐で、年輪（マサ）の目がほぼ均等になるように調整していく技術があります。そして、これらの木々がかつて最も必要とされたのは、樽です。木の性質は年輪の内側、真ん中部分、外側で違うことを利用して作られています。そして、節が絶対にあってはいけないのが樽。節から、漏れてしまうからだそうです。そして、樽丸づくりの余った端材の利用で割り箸ができました。ちょっとした時代の変化だけで、何代もの方々から託された最高の杉づくりへの緊張感がぷつっと切れてしま



均等に育成された「マサ」

まって、良いはずない！と思うばかりです。間伐材とはちがいで、100年、200年、400年…これほど繊細に将来を託して厳選され育てられた木々を、簡単に木材チップにはできないという、皆さんの想い、私も受け取りました。